

〔資料〕

家族システムを解釈する方法としての『円環的認識論』 —家族看護における位置づけと活用—

今井 美佳¹⁾ 柳原 清子²⁾

要 旨

家族をシステムとして捉えた家族アセスメントの見方とは、家族集団としての家族メンバー間と、家族のメンバーと外部（ケアを提供する看護師も含まれる）との、複数の関係性に注目する事である。複数の人間同士の関係の理解を助けるものとして、円環的認識論（circular epistemology）がある。これは、相互作用やコミュニケーション過程を重視する見方とされる。G. Batesonは、人間の生における相互作用の存在を重視し、生命のコンテクスト（文脈）を学ぶという事を、二つの生き物の外的な関係の問題として論じた。そして、関係とは、相互作用の当事者である二者により、それぞれの単眼視覚を持ち寄った双眼的な視界を与える二重視覚で作り出される二重描写の産物であるとした。家族看護実践では、この二重描写を理解することが重要であり、そのために家族メンバーが「現実」として語る苦悩や病の語りに注目する。この語りは、家族システム内・外のシステムとの交流におけるメンバーの調整の産物であり、交流相手との二重描写をもとに家族メンバーが表す物語である。時間軸上に配置された経験を伴う物語から、家族メンバーのコンテクスト（文脈）を学び知ることで、援助者は、相互作用に関与する人々にとっての意味が付与された奥行きある情報で理解する事ができる。円環的認識論に基づき家族システムを解釈するもの見方とは、家族の相互作用を、当事者のコンテクストを通して現れる「関係」として可視化しようと試みることである。そして、そこでは援助場面の当事者である家族システムと看護師の関係も考慮される。

キーワード：家族システム、相互作用、複数の関係性、円環的認識論、コンテクストの理解

1. はじめに

家族看護が対象とする家族とは、複数の様々な年代のメンバーで構成され、夫婦・親子・きょうだいといったサブシステムの関係の中で、個人としての考え方（認識・感情）と立場と役割を持ち、他のメンバーとのやり取りを行いながら、集団としての機能を維持している。メンバーは、それぞれが家族外の社会からも影響を受け、役割を持っている。このように家族とは、複数の人間同士が相互に作用しあう状況、すなわち相互作用と、それに伴う複数の関係を併せ

持った状態で存在している。家族アセスメントで家族をシステムとして捉える見方とは、ある家族メンバーひとりの様相を捉えるだけではなく、集団としての家族メンバー間と、家族メンバーと家族外部との相互作用と、複数の関係性に注目する事である。

この人間同士の相互作用や複数の関係について、心理学者の遊佐は、『人間の様な生物体システムはフィードバック円環（因果関係が円環での鎖状を形成している状態）をもつ。そして人間関係における因果関係は、他のシステムと関係や交流を持ち、相互に影響を与えあうため、単なる円環因果律より複雑な、複数の円環が円環関係を構成している関係である』と指摘している。そして、その理解を助け

1) JA長野厚生連佐久総合病院 佐久医療センター

2) 長野県看護大学

るものとして、円環的因果律による考え方、即ち円環的認識論 (circular epistemology) に触れている (遊佐, 2016)。人間同士の相互作用や複数の関係に注目したアセスメントによる看護を特徴とする家族看護において、この円環的認識論に基づいて人々の関係をとらえ、様相を理解していく考え方は重要であると言える。家族とかかわりをもつとき、看護師と家族メンバー (患者も含む) “個人” の二者間の相互作用へ注目する場合は、いわゆる一対一の関係性として、看護実践における人間関係の概念枠組みを示したペプロウや、トラベルビーが唱える看護理論でも考える事ができる。どちらも保健上の問題解決という目標に向かうプロセスそのものを看護とし、一対一の関係における相互作用によってプロセスが進展していく様子が、関係性の位相として示されている (中山, 2020; 岡谷, 2020)。しかし、家族看護を考える時、看護の対象となる家族メンバー (患者も含む) は、家族の一員として他の家族メンバーとの複数の相互作用の只中にも居る。つまり、看護師との一対一の関係における相互作用だけでは取まらない、複数の人間同士の、重なり合った相互作用や関係を扱うことになる点が、家族看護実践の独自性といえよう。それ故に、看護実践者にとっては、円環的認識論に基づく思考による家族システムの理解が可能になることが、家族看護実践を行う上で基盤になるものであると思われる。

一方で、円環的認識論という言葉自体が看護では聞きなれない言葉であり、円環的認識論に基づいた家族システムの理解とはどういった理解の仕方であるのか、どのように実践と関連するのかは家族看護の書籍においても僅かな記載に留まっている。国内の既存文献においては、看護師が対象理解のために多面的なアセスメントをする様子 (廣部, 飯田, 2001; 渡邊, 丸山, 横川, 他, 2018; 浅海, 村上, 2021; 山本, 浅野, 2018; 山本, 2019) や看護師の質問方法の特徴 (佐々木, 2005)、家族内の体験やコミュニケーションの様子を表現するため (安武, 2011) に「円環的思考」「円環的」という用語が用

いられていた。この他、既存の家族看護のアセスメント/支援モデルにて症例を分析し、看護師の家族アセスメントの変化や事例の経過・転帰を説明した報告が主であり (白坂, 古川, 佐々木, 他, 2002; 岩井, 大藤, 切畑, 他, 2010; 竹内, 2008; 永野, 井上, 西山, 他, 2004; 有坂, 木内, 谷原, 2004; 岩木, 為国, 前川, 他, 2002; 田邊, 武田, 渡辺, 2000)、円環的認識論に基づく思考による家族システムの理解の仕方や実践の特徴をくみ取ることには焦点化されたものがないというのが現状である。これらから、家族看護において円環的認識論が重要な家族の見方・援助の基盤とされながら、それをを用いた実践がどのような特徴をもつものとされているのかという点については、いまだ十分に言語化されているとは言い難いことが考えられた。

そこで、本稿では、円環的認識論とは何か? という視点に立ち戻り、複数の相互作用が存在する家族システムを解釈する方法としての「円環的認識論」が、家族看護においてどのように位置づけられ、活用されているのかを論述することを目的とする。

II. 方法

本稿の手順として、まず、円環的認識論について書かれた書籍や文献などを調査し、関連分野における位置づけを概観した。そして、円環的認識論について提唱している人類学者であり社会学者である G. Bateson の著作をもとにその哲学的背景と特徴を述べた。最後にこの考え方を基盤とした対象理解について、既存の家族看護モデルを参照しながら、コンテキストの理解という視点から検討を行い、円環的認識論に基づく思考で家族システムを解釈することによる示唆を述べた。

III. 結果

1. 関連分野における円環的認識論の位置づけ—家族療法とシステムズ・アプローチ

円環的認識論については、家族療法分野の書籍や文献が論述していることが多かった。家族療法は家族集団を援助の対象とする臨床であるが、かねてより円環的認識論を基盤にした人間同士の相互作用と関係についての考え方を重要視してきた。家族カウンセリングを専門とする亀口は、この円環的認識論について、原因と結果とは相互に影響を与え合っている、相互作用やコミュニケーション過程を重視する見方（亀口、1998）と解説し、円環的認識論を、家族関係を直接扱うための特殊レンズと位置付けたうえで援助方法を提案している（亀口、2005）。この、円環的認識論が家族に対する臨床で用いられる背景には、家族をシステムとして捉える見方が関連している。

家族をシステムとして捉える見方は、1950年代に家族療法に導入された『一般システム理論』にはじまったと言われており、この理論は家族集団のアセスメント及び複数メンバーへのかかわりにおいて重要な理論とされている（亀口、1998）。一般システム理論は、L. Bertalanffyによって1948年に発表された理論である。この理論は、多種多様なシステム（組織、秩序ある集合体）全般について、それを取り巻く環境との関係を考慮に入れて理解しようとするための理論、いうなれば、ものの見方として示されている（遊佐、2016）。その後、家族療法においては、実践場面で家族や人間のよう一般的に複雑に考えられるものであっても、その複雑さを失わずに明確に理解することを目指し、一般システム理論を応用したシステムズ・アプローチという考え方が発展した。システムズ・アプローチの権威と言われる、J. G. Millerは、生物学の立場から、人間システムに焦点を当て、『患者』と呼ばれる人間または人間の集団に影響を与えるファクターをより包括的に、そしてそれらのファクターの相関関係をも考慮

に入れ、『患者』の問題の治療に携わるための概念的枠組みとして『一般生物体システム理論』を提唱したとされる。この生物体システムの特性とされているのが、①開放システムとして他から影響を受ける②フィードバック円環がある③円環的因果律により、純粋な意味での原因-結果という関係は存在しないという3点であり、こうした生物体システムを、よりよく理解するための考え方とされているのが円環的認識論（circular epistemology）である。遊佐は、システムズ・アプローチにおいては、セラピストも環境システムの構成員として家族と相互に影響を与え合っていると述べ、そのとらえ方の根源に円環的思考を置いている（遊佐、2016）。

このように、家族のような集団を援助の対象とする臨床実践においては、家族をシステムとして捉えることが有用とされ、その際に人々の相互作用という現象について理解をする基盤として円環的認識論が重要視されてきた事は家族療法の知見が示している。そこで、改めて円環的認識論がどのような特徴をもつのか、哲学的背景も含め検討する。

2. 円環的認識論の哲学的とらえと特徴

円環的認識論とは、前述のBatesonの発想である（Bateson, 1979）。Batesonは、一般システム理論を発表したBertalanffyと同年代の研究者であるが、『我々は皆が、生きている世界の一部を成す』という考えの上で、科学と哲学の一支流が融合した認識論という形を用いて、世界を二元化しない精神の定義を提示した（Bateson, 2001）。Batesonは、物理学や科学の中で築かれた、人間を自然と乖離した特別な存在として捉える見方や、直線的な論理の一貫性に対する盲目的崇拜の限界を指摘し、人間の動物的=霊的属性に注目し、『精神/身体の二元論解消には、自らの示す考え方によってアプローチが可能である』と述べている。特に、人間の生における相互作用の存在を重視し、『生きるということはどんなコンテクストの中に身を置くことなのか、ということの学習は、二個の生物間の外的な関係の問題として論じなければならず、関係とは常に二重描写の産物だ』

と主張している (Bateson, 2001)。この点については、著書の中で更に詳しく解説されている。『人間の脳が左右の眼で捉えた視覚でものの奥行きに関する情報を得るように、相互作用に関わる二者が、左右の眼のようにそれぞれの単眼視覚を持ち寄って奥行きのある両目視覚を作っており、その二重視覚で作られられるものこそが関係である』。Batesonによれば、関係は個々の人間の内側にある性質によって述べられるものではなく、人間同士の間で起こる事に根差しているため、両者の間で起こることを通して行動を理解することから、私たちは人間についての奥行きのある新たな情報が得られるのだという (Bateson, 2001)。この主張は、デカルト的二元論や還元主義的思想などをひとまとめにした、直線的認識論、すなわち『特定の原因と結果を直線的に結びつける、あるいは、ある部分が他を統制する、などとする論述』を解消するものと言われている (亀口, 1998)。

Batesonが述べる円環的認識論は、日々人間が生きていく中で生じている相互作用という現象に注目し、相互作用するもの同士の関係を『関わりあう二者の二重描写の産物』として理解しようとするものの方であると言える。しかし、これだけでは家族システムの重なり合う相互作用や複数の関係の捉え方とどのように繋がっていくのか、という点が十分説明しきれていない。その点について考えるにあたり、まず、集団としての家族にかかわる援助者が、家族メンバーの関係をどのように捉えていくのかについて検討したい。すなわち、家族システム内のメンバーが重なり合った円環関係による相互作用という現象の中に居て、メンバー同士の関係とはメンバーそれぞれの視覚、すなわち物事の見え方や考え方が持ち寄せられた二重描写によって成立しているという、円環的認識論のものの方から家族を対象とする看護実践を行うには、第一にメンバーそれぞれの視覚を捉えることを必要とする。家族にかかわる援助者は『二者間の二重描写』をどのようにして得ていけばよいのだろうか。この点について、家族看

護のモデルを参照しながら述べる。

3. 円環的認識論からコンテクスト (文脈) 理解による対象理解の方法へ：家族看護での活用

1) 家族看護のモデルにおける円環的認識論とナラティブ・アプローチ

家族療法の知見が蓄積された後、その影響から1970年代後半、家族そのものを看護の対象とする家族看護学が提唱されるようになった (藤岡, 2014)。家族に焦点を当てた看護モデルとして開発された (森山, 2004) カルガリー家族アセスメントモデル (以下CFAM)・カルガリー家族介入モデル (以下CFIM) の発案者である、カルガリー大学のL. M. Wrightは、著書の中で次のように述べている。『家族の行動は、直線的な因果関係ではなく、円環的な因果関係という観点から理解するのが最も適している』 (Wright, Leahey, 2009) Wrightらは、全ての看護師は家族をヘルスケアに巻き込む知識と能力を習得する必要があると述べ、家族をシステムとして捉える看護を理解することの重要性を強調した。

家族と看護師との関係を概念化するための枠組みとされるCFAM・CFIMの背景にはシステム論の他にコミュニケーション理論や変化理論、認知の生物学等が含まれている。そして本モデルを用いた家族への援助において活用されているのがナラティブ・アプローチである。このナラティブ・アプローチは、言葉が我々の生きる世界を形作るという、社会構成主義 (社会構築主義) の考え方に基づくものである (野口, 2002)。Wrightらは、『家族のメンバーが構築した“現実”を変える方法は、家族の中で新しい相互作用の方法を開発することであり、看護師はその新しい相互作用を支援するのだ』とモデル内で述べている。社会構成主義の前提の一つである『世界や我々自身を理解するための言葉や形式は、社会的産物—歴史的・文化的に埋め込まれた人々の交流の産物である』 (Gergen, 2019) を基に考えると、家族メンバーが自らの「現実」として語った苦悩や病の語りというものは、家族システム内もしくは家族外のシステムとの交流のなかで、そ

こに関わる人間行為の調整, すなわち相互作用を経た産物として, 当事者たちにとっての苦悩や病として現われている。それ故看護師は, 家族の苦悩や病として現われている「現実」を変えるために, メンバーが新たな交流による相互作用を獲得できるような支援を行う存在ということになる。

ここで注目するのは、『家族メンバーが交流の産物として示した苦悩や病の語り』とは, 彼らがこれまで暮らしや文化の中で交流した相手との二者間の二重描写の様相をもとに家族メンバーが語りとして表す物語であり, 当事者の認知している体験であるということである。援助者はその体験を知ることから, 家族メンバーが家族システム内外の人々との間で描いている二者間の二重描写=関係を理解していくのである。そして, 二者間の二重描写としての「関係」を, 外部システムである援助者側からの見え方ではなく, 内部システムである家族メンバー当事者側の見え方として解釈していくための手段においても, 家族メンバーの視覚世界を, 家族メンバーの発する言葉によって共有するナラティブ・アプローチが有用なのである。

尚, この二者間の二重描写は, 家族システムにおいては, 複数の人間同士の相互作用が重なる中でより複雑なものになっていることが予想される。援助者がナラティブ・アプローチによってこの複雑な関係を読み解こうとすること, それは, 家族員個々の体験を超えた, 家族システムとしての家族のありようを解釈していく作業とも言えよう。

2) 家族システムの解釈におけるナラティブ・アプローチの有用性: コンテキストの理解

家族システムとしての家族のありようを解釈していくことに関連して, 山本は, ナラティブに依拠して, 多声的な物語としての家族理解の意義について触れている(山本, 2019)。山本は, 家族内の“関心事”について, 家族メンバーそれぞれの立場からの物語として記述することを通して, 家族のなかでは, 相手の思いを汲み取りながら補完的に自らの家族について物語が作られていることを示した。そし

て, その物語を聞く看護者が, 多声的な物語として家族を理解することは, 家族ひとりひとりの物語の重なり合いのなかに, 家族としてのどのような考え方があるのかを見出すことを助けると考察している。つまり, 看護者は, 家族メンバー個人の語る, 二者間の二重描写による物語それぞれを, 家族集団の中で重ねあったり繋げたり, 対比させたりすることで, 家族システムの姿を解釈しようとする事が考えられる。

Batesonは, 関係もしくは相互作用と絡む二重描写から, コンテキストが学習されると述べている(Bateson, 2001)。すなわち, ナラティブ・アプローチにより相互作用を生み出す“関係”としての二者間の二重描写を掴むこととは, 二者間のコンテキスト(文脈)を学び知ることであると言える。この, コンテキスト(文脈)には, 相互作用している二者の, 時間軸上の経験も含まれる。人々は, 人生を理解しようとする努力の中で, 自身と周りの世界に関する首尾一貫した説明が得られるような形で, 自らの経験を時間軸上に順序よく配列する。そのような説明-ストーリーや自己物語(self narrative)によって経験を物語る事が, 人々の人生と人間関係に意味を与えるという(White, Epston, 2017)。二者間の二重描写から, 相互作用している二者のコンテキスト(文脈)を知ることとは, その人達の時間軸上に配置された経験に基づく物語を知る事であるため, 相互作用に関与する人々が抱いている“意味”が付与され, 聞き手の解釈が深められ, Batesonが言うように情報に奥行きを持たせた理解の仕方をすることができるのである。

遊佐は, 患者の現在までのプロセスをサブシステムのプロセスとして把握し, 上位のシステムとの関係で理解するというアプローチ, 即ち患者をそのコンテキストと照らし合わせて理解しようとする事を提言する(遊佐, 2016)。患者にとっての上位システムとは, 社会や地域, 仲間, そして家族等である。つまり, 家族をシステムとして捉えた家族看護を行う際にも, 患者や家族メンバー個々が現在まで

辿っているプロセスは、個々にとっての上位システム（地域や社会、家族内のサブシステム）との現在との関係の中で理解する必要がある。このように家族メンバーのコンテクスト（文脈）は常に動的・主観的な要素を含んでおり、家族構成等のような客観的情報やカルテに記載されている過去の言動の記録だけでは、今、目の前の家族の姿を把握できない。目の前の家族が、今どのようなコンテクスト（文脈）の中に居るが故に、このような「関係」が現れてみえるのか。家族看護においては、看護師がナラティブ・アプローチによって、時間性を伴う経験の、物語としてのコンテクスト（文脈）を掴み、「関係」を可視化しようとするこの解釈の過程こそが、円環的認識論のものの見方から家族システムを理解し家族を援助するためには欠かせないことなのである。

3) 円環的認識論で捉える家族システムと援助者の関係

人間同士の相互作用に注目することは、当然、家族にかかわろうとする援助者と家族システムとの相互作用も考慮に入る必要がある。この点について CFAM・CFIMは冒頭の部分には『家族システム看護介入は、看護師の行動と家族の反応に焦点を当てる必要がある。これはクライアントの行動に焦点を当てる看護診断や看護成果とは異なるものである』と述べられている。（Wright, Leahey, 2009）そして家族をシステムとして捉える看護において効果的な看護介入とは、看護師が提供する介入と家族メンバーの生物心理社会的精神的構造との「フィット」、すなわち噛み合わせにより、クライアントと家族が反応するものである、とした（Wright, Leahey, 2009）。この、『噛み合わせによるクライアントと家族の反応』というのは、看護師の言動に対し様々に家族が反応する様子を示しており、家族看護実践上の看護師と患者・家族との間でのやりとり、相互作用の存在を表している。先の家族療法におけるシステムズ・アプローチ同様に、家族看護実践においても円環的認識論のものの見方を用いて家族内の相互作用に限らず、家族にケアを提供しようとする看護師と

家族システムとの相互作用と関係へも注目して看護を行うことが、当然視されているのである。

IV. 考 察

本稿では、円環的認識論に基づいた思考による家族システムの理解の方法について円環的認識論とは何か？という点に立ち返り論述することを試みた。その過程で、既存の文献や書籍における知見を述べ、対人援助臨床における活用の経緯を概観し、円環的認識論について提唱している Batesonの著作をもとにその特徴を述べた。そして実践における対象理解の方法について、コンテクスト（文脈）の理解という視点からナラティブ・アプローチとの関連について提起した。これらから、円環的認識論に基づき家族システムを解釈する事が看護実践にどのような可能性をもたらすのか、どのような課題があるのか考察する。

1. 援助者と家族の関係の可視化による看護実践検証と共有の可能性

円環的認識論によるものの見方の最大の特徴は、人々が生活の中で体験している出来事を相互作用の点から捉えたことであり、人間関係における現象を当事者個人の特性や課題だけでなく当事者にかかわろうとする者も含めて捉えようとしているところにある。家族看護において、援助者と援助の対象者の関係に注目するという事は、米国の家族看護理論家 H, Hansonの著書においても述べられている。Hansonは、看護師が家族ケアに従事する際の重要な概念の一つとして、ヘルスケアの治療的三角関係について触れ、治療的三角関係のそれぞれの頂点に、患者・家族員・ヘルスケアの専門職を置き、『対角線上の二者間における緊張状態を安定させるために三項目の人物が巻き込まれた時に、三角関係が発生する』ことを述べた（Harman Hanson, Boyd, 1996）。家族看護においては患者と看護師、患者と家族、あるいは看護師と家族の間に関係性の困難さが発生している場合、第三項に位置する人物もケアの関係性

に巻き込まれていくこととなる。円環的認識論に基づき、人間同士の相互作用に注目するという在り方は、援助の対象（家族システム）内の現象を客観的にアセスメントするがシステムには干渉しない看護師ではなく、援助者であると同時に家族システムとも相互作用する存在としての自身の姿を考慮に入れることの重要性を、看護師に示している。これは、家族療法におけるシステムズ・アプローチや、家族療法の実践において、観察対象は観察者の視点によって見え方が変わってくるというセカンドオーダーの視座（楢林, 2020）とも類似する考え方である。看護師は、自らも目の前の援助関係に巻き込まれている存在であることを意識することで、家族システム内の二重描写だけでなく、家族システムと援助システム間の二重描写＝関係の可視化作業も考慮することになる。この過程では、援助対象とする家族システムと援助システムである自分というそれぞれのコンテキスト（文脈）に注目することとなり、食い違いや思い込みのような差異に気が付きやすくなる。その結果、自らの家族システムの捉え方やかわり方を検証したり、一見すると「個人の価値観」ととらえられがちな家族とのかかわり方を、他者と共有し検討することが可能になると考える。

2. 二者間の二重描写だけでは説明しきれない家族看護における相互作用

円環的認識論によるものの見方において、二者間の二重描写で関係を捉えるという Bateson の提唱に遡り論述した。しかし、実際の家族看護実践においては、二者間の二重描写としての関係に留まらない、家族システムの複雑な関係を扱っていることが予想される。父、母、子など、それぞれの家族メンバー同士の二者間の関係と、家族システム内全体やサブシステム内における家族メンバー同士の関係への視点については、「二者間の二重描写」だけでは説明が難しい。

例えば、家族療法は、非行や心身症といった家族が「問題」と捉える現象を、「関係」の問題として定義し直し、家族の変化への資源を最大限に引き出

すことで家族関係を変化させ、症状や問題行動を消去・軽減する方法をとる（中村, 2017）が、家族看護は当初より治療やカウンセリングを目的としていない。家族全体を看護の対象とし、家族システムを理解することを通して患者の健康問題に対応するために家族が持っている機能を最大限に発揮できるように働きかける（上別府, 井上, 新井, 他, 2021）のであり、その際に家族システム内の複雑な相互作用がどのように捉えられて看護実践と繋がっていくのかについては、今後検証が求められる内容であると考える。更に、援助者と家族システムの間関係についてもコンテキスト（文脈）を通じた理解が可能となる可能性がある一方で、看護師が捉えたその二重描写の妥当性をどのように判断するかといった点は議論を要する部分と考える。

3. 家族看護実践探求の可能性

円環的認識論に基づく円環的思考は、人間関係を調整する仕事、学校教育相談などでも有効な武器になる（八巻, 2014）と言われ、対人支援活動を行う分野において新たな視点をもたらす思考法として注目されている。家族看護においても、円環的思考を用いることにより、かかわりに困難を感じ葛藤が生じる場面において、コミュニケーションの相互作用で起きていることを理解し、現象を捉えていくことが有用とされている（畠山, 2019）。先に、円環的認識論とナラティブ・アプローチの関係から、看護師が家族メンバー個人の語る二重描写による物語それぞれを、家族集団の中で重ねあったり繋げたり、対比させたりすることで、家族システムの姿を解釈しようとする事が考えられることを述べた。これまで、家族看護実践を探求する研究が蓄積されているが、改めて円環的認識論に注目した角度から実践を分析していくことで、どのように家族システムを捉えているのか、特に複数の人間間の相互作用と関係を扱う家族看護の独自性や特徴、実践の詳細がより鮮明にされると考える。

また、援助者自身も含めた複数の人間同士の重なりの合った相互作用の中での家族看護実践について具

体的な知見を探求していくことで、円環的認識論の家族看護への適用の特徴や活用の詳細等が明らかになる可能性もあり、家族看護学にとっても重要な課題であると考え、円環的認識論は相互作用に注目をするという点や、その実践方法における社会構成主義との関連から、既存の知見をこのような視座から考察することも課題と思われた。

V. 結 論

円環的認識論は、人間の生における相互作用に注目し、相互作用するもの同士の関係を『関わりあう二者の二重描写の産物』として理解しようとするものであるという Bateson の提唱から、人間同士の相互作用が重なる家族システムにおいて、複雑なものになっている二者間の二重描写を、援助者がナラティブ・アプローチによって読み解こうとすることは、家族システムの姿を解釈する事であると述べた。そして、その過程において、看護師が時間性を伴う経験の、物語としてのコンテクスト（文脈）を掴み、“関係”を可視化しようとするのが、円環的認識論に基づいた思考により家族システムを理解し家族を援助するために重要であることに触れた。今後は、円環的認識論に基づく家族システム理解の方法や、援助者自身を含めた複数の人間同士の相互作用において家族看護実践がどの様に行われていくのかといった具体的な知見を探求していく事が重要な課題である。

謝 辞

本論文をまとめるにあたり、率直な意見で議論を重ねてくださった「長野県看護大学大学院質的研究チーム」の皆様及び多様な現場で実践と向き合われている家族支援専門看護師の仲間の皆さまに深謝いたします。

論文の第一著者は研究の発案、研究デザイン、データ収集、データの解釈、論文草稿執筆の全てのプロセスを担った。

論文の第二著者は論文構成、データの解釈と解説内容を検討し、論文草稿の質向上の役割を担った。

本研究における利益相反は存在しない。

〔受付 '22.11.09〕
〔採用 '23.08.02〕

文 献

- 有坂真智子, 木内生恵, 谷原泰子: 透析患者を支える家族への看護介入 カルガリー家族アセスメントモデル・カルガリー家族介入モデルを用いて, 日本腎不全看護学会誌, 6(2): 73-76, 2004
- 浅海くるみ, 村上好恵: 薬物療法中に複数の症状を抱えた転移・再発乳癌患者の予後を見据えた外来看護の実践と困難, 日本がん看護学会誌, 35(1): 1-9, 2021
- Bateson G.: Multiple Versions of Relationship: Mind and Nature A Necessary Unity, 132-133, E. P. Dutton, New York, 1979
- Bateson G. / 佐藤良明訳, 精神と自然 生きた世界の認識論 改訂版 (第1刷): P125, 新思索社, 東京, 2001
- 藤岡 寛: 家族看護学—その歴史的経緯と展望, 看護と情報, 21: 3-7, 2014
- Gergen K. J. / 永田素彦, 深尾誠訳, 社会構成主義の理論と実践 関係性が現実をつくる 初版第6刷: 64, ナカニシヤ出版, 京都, 2019
- Harmon Hanson S. M., Boyd S. T.: Family Health Care Nursing: Theory, Practice and Research, 14-37, F. A. Davis Company, Philadelphia, 1996
- 畠山とも子: 家族システムとシステムズアプローチの基本的な考え方, 家族ケアの“困った場面”解決法 システムズアプローチの理解と活用, メジカルフレンド社, 65(5), 10-23, 2019
- 廣部すみえ, 飯田澄美子: 訪問看護職者の判断の特徴, 日本地域看護学会誌, 3(1): 68-75, 2001
- 岩井さとみ, 大藤留美, 切畑亜矢子, 金井ちづる, 恵紙量子: 家族機能へのアプローチを行った退院支援 “家族の了解を得た退院”を実現するために家族調整を行って, 日本精神科看護学会誌, 53(3): 198-202, 2010
- 岩木幸代, 為国佳子, 前川惣予, 佐々木奈由: 痴呆患者・家族の関係改善を図るためのアプローチ, 日本精神科看護学会誌, 45(1): 99-102, 2002
- 亀口憲治: 家族心理学研究における臨床的接近法の展開, 心理学研究, 69(1): 54-65, 1998
- 亀口憲治: 家族療法的カウンセリング 初版第2刷, P32, 駿河台出版社, 東京, 2005.
- 上別府圭子, 井上玲子, 新井陽子, 他: 系統看護学講座別巻 家族看護学 (第1版), 6-8, 医学書院, 東京, 2021
- 森山美知子: カルガリー家族看護モデルからみた家族看護実践知, 家族看護学研究, 9(3): 128-130, 2004
- 永野由美子, 井上カノ子, 西山エリ子, 上平悦子: 長期入院の痴呆性老人をもつ家族への看護 カルガリー家族看護を用いて, 日本看護学会論文集老年看護, 34: 112-114, 2004
- 中村伸一: 専門家による家族介入の現在—家族を外側から支える実践— 家族療法のいくつかの考え方, 家族社会学

- 研究, 29(1): 38-48, 2017
- 中山洋子: ヒルデガルド E.ペプロウ 看護における人間関係の概念枠組み, 筒井真優美 編, 看護理論家の業績と理論評価 第二版, 115-130, 医学書院, 東京, 2020
- 檜林一郎: 家族療法とシステム論 認識論の変遷を巡って/サードオーダーの臨床は可能か, 家族療法研究, 37(1): 4-13, 2020
- 野口裕二: 物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ, 第1版第1刷, 16-17, 医学書院, 2002, 東京
- 岡谷恵子: ジョイス・トラベルビー 人間対人間の看護, 筒井真優美編, 看護理論家の業績と理論評価 第二版, 223-235, 医学書院, 東京, 2020
- 佐々木由美: 終末期患者の予後方針選択に悩む家族への関わり 事例への意図的看護介入を試みて, 日本看護学会論文集成人看護, 1135: 92-94, 2005
- 白坂文恵, 古川友子, 佐々木幸子, 前田洋子, 鈴木栄子: 夫婦が良好に機能していないケースへの援助 カルガリー家族アセスメント・介入モデルを用いて, 八戸市立市民病院医誌, 20(2): 100-104, 2002
- 竹内明子: 筋萎縮性側索硬化症の患者と家族へのケア カルガリー家族アセスメントモデルを用いてのケア, 長野県看護研究会論文集28回: 85-87, 2008
- 田邊恵理, 武田和代, 渡辺美登里: NICUにおけるファミリーケアの実際 カルガリー家族システム看護理論を用いて, 日本新生児看護学会講演集10回: 144-145, 2000
- 渡邊千春, 丸山美香, 横川史穂子, 柏木夕香, 三浦一二美, 樋口伸子: 終末期がん患者の輸液を減量・中止する際に看護師が行う合意形成支援プロセス, 日本がん看護学会誌, 32(1): 118-126, 2018
- White M., Epston D./小森康永訳, 物語としての家族 新訳版: 14-20, 金剛出版, 東京, 2017
- Wright L. M., Leahey M.: Nurses and Families. A Guide to Family Assessment and Intervention 5th edition. 7-44, F.A Davis Company, Philadelphia, 2009 https://www.academia.edu/37173925/Nurses_and_Families_A_Guide_to_Family_Assessment_and_Intervention_5th_edition. 2022年7月19日検索
- 八巻 秀: 「円環的思考」について—「問い」から「想像」へ, そして「仮説」へ, 駒沢大学心理臨床額研究, 13: 31-33, 2014
- 山本真美, 浅野みどり: 子どもの見方を変えていくしなやかさ—療育教室に参加する母親と看護者との対話を通じた協働的な学び—, 日本看護研究会誌, 41(5): 863-874, 2018
- 山本真実: 多声的なものがたりとしての家族の理解—地図や鉄道へのこだわりについて家族ひとりひとりの物語—, 家族看護学研究, 25(1): 14-26, 2019
- 安武 綾: 認知症患者を介護している家族の体験のメタ統合, 家族看護学研究, 17(1): 2-12, 2011
- 遊佐安一郎: 家族療法入門 システムズアプローチの理論と実際, 星和書店, 東京, 2016

Interpreting the Interactions in Family Systems with “Circular Epistemology” Roles and Use in Family Nursing

Mika Imai¹⁾, Kiyoko Yanagihara²⁾

1) Saku Central Hospital Advanced Care Center

2) Nagano College of Nursing

Key words: family as a system, interactions, relationships, circular epistemology, understanding the context

The perspective of family assessment, which treats the family as a system, focuses on the relationships between family members as a group and one another as well as the external world (including nurses who provide care). The application of circular epistemology assists in understanding these relationships between multiple people. This perspective emphasizes the need for interactions and communication processes.

G. Bateson emphasized the existence of interaction in human life. He then discussed learning the context of life as a matter of the external relationship between two creatures. And relationship is always a product of double description. It is correct (and a great improvement) to begin to think of the two parties to the interaction as two eyes, each giving a monocular view of what goes on and, together, giving a binocular view in depth. This double view is the relationship.

Understanding this dual depiction is important for practice concerning family nursing, as doing so involves focusing on the narratives of distress and illness that are told and perceived to be the “reality” of the family members. These narratives are the product of coordination between members with regards to interactions within systems both inside and outside the family dynamic. They are the stories told by family members based on the dual depiction aspect of the two parties with whom they interact. Through learning and knowing the context of family members from their narrative accompanied by experiences placed on the time axis, nurses can understand the individuals with depth information that is given meaning for the people involved in the interaction. Interpreting the family system based on circular epistemology is an attempt to visualize family (including patients) interactions, that appears as a “relationship” through the context of the party. And the relationship between the family system and the nurse in the helping relationship is also taken into account in that situation.